

## 第2章 事業初年度概観

### ○ 事業受託に先立って

スーパーグローバルハイスクール研究指定校事業（以下「SGH」と称する。）の3年目が終了し、事業一期生を卒業させた平成29年3月頃から、事業終了後のカリキュラム構想が大きな課題であった。全くの手探りの中で進んできた一期生への指導の反省を基に、あえてSGH校を選択して入学してきた二期生以降への指導改善を進めながら、まずはSGHでのカリキュラムについて成果と課題を点検した。

その詳細は「SGH研究報告書・第5年次」にまとめたが、要点を記述すると

（成果）

(1) Global をキーに、生徒に広い視野、主体性を養う点では各種の取組は有効。

(2) 考えをまとめて意見をもち他者に表現する力を育成することができた。

（課題）

(1) 教科間連携、キャリアとの接続意識等を十分活性化させることができなかった。

(2) 答の出ない問いに取り組み、研究を深く掘り下げていく力は十分育たなかった。

(3) 教員の負担の均等化、軽減を図ることができなかった。

等である。

これを受けて、SGHの5年間を生かした次の教育課程とは何かを検討した。結果、全面継承でなく、かといって全廃でもなく、評価できる点を生かし、変えるべきについては大胆に変えていくということで、今後の方向性が承認された。

これを踏まえ、教務部と教育課程検討委員会を中心にして、事業5年目の平成30年6月に「課題研究（総合的な探究の時間）」を核とする新たな教育課程を編成した。教育課程上の特例がなくなることと想定し、研究的活動を行う時間を確保するとともに、「課題研究」を核とすることで主として課題(1)の解決を図り、また、全職員の取組による時間と位置づけることで課題(2)の解決を図る指導を徹底することがねらいであった。また、職員全体での検討を踏まえて、負担が多かった学校設定科目を整理し、さらに、SGH初年度から実施していた土曜授業を廃止して、週時程を50分6限（土曜4限×2回／月）から45分7限に変更した。全県的には土曜授業が行われていないため、土曜日に部活動の公式大会等が設定されることが多く、公欠を余儀なくされたり教員自身も引率・運営のための振替が必要になったりして、部活動参加率の高い本校では負担が大きかったためである。このほか、SGHで効果的とされた海外研修や国際交流、地域の学習活動、課外の講習を主体とするアドバンストコースの設置など多くの取組については、継続する方向となった。

そして、噂されていたSGH後の新事業については、「新事業の趣旨が、本校の定めたこれらの方向性と一致するなら」という前提で受託を目指すことが確認された。そして、平成30年中には事業の大枠が示され、平成31年1月に行われた事業説明会の内容を学校に持ち帰り、本事業の趣旨を確認の上、正式に事業の受託を目指すこととなった。

### ○ 教科・科目等の取組について

事業開始初年度から全学年において教育課程を一新すると、一貫性が保てなくなるため、2、3年生については従来の教育課程を継続した。ただ、従来からの教科・科目等の取組も新事業に合わせて組み替えた。たとえば、教育課程上の特例で設定していた2年生の「現代の課題」は、「現代社会」2単位においてある程度教育内容を受け継ぎつ

つ、「情報の科学」1単位分は切り離して実施した。また、「現代の課題α」についても、基本的な取組は継承しつつ、内容やその趣旨を見直すことにした。3年生の「未来創造」については、予定していた通り研究まとめの手法を整理し、全てをデジタル化するのではなく、適宜紙と使い分けるようにして作業を効率化させ、教員の負担を軽減した。これらは、予定していたとおり、実施することができた。

また、新しい教育課程の1年生では、継続的な取組（教科「グローバルコミュニケーション」）を精選しながら実施しつつ、一部で次年度の「課題研究」を意識した取組（「グローバル国語」等の時間を用いた講演会など）も実施した。また、教育課程上の特例を無くしたので、公民科と情報科の科目を学習指導要領に定めるとおり実施した。ただし、教科の指導の範囲内でSGHの取組のうち継承できる部分（公民科の、地域研究をテーマとした夏期課題など）を実施している。また、特別活動においても、次年度の「課題研究」に向けた取組として、気づきノート、夏期の課題、LHR等を活用した交流会、研究課題の志望調査等を行うこととなった。これは、事前に予定されていなかったため教育課程には組み込んでいなかったが、今年度がスタートしてから「課題研究」の実施に向けて研究を進めるチームからの提言により実施した。

#### ○ 令和2年度「課題研究」の実施に向けた取組について

本事業に基づく教育課程に予定された、来年度からの第2学年における「課題研究（「総合的な探究の時間」2単位）」の実施に向けて、今年度4月から、教育企画部担当と第1学年の先生方間で実施に向けた協議を進め、また、研修を深めた。その内容は、10月に教育課程検討委員会（各教科主任によって構成）を通じて各教科に共有し、意見を集めた。また、教員研修3回（講師1回、内部2回）を実施し、次年度当初にも研修を計画して、第2学年の生徒と学校全体で取り組む「課題研究」実施に向けての態勢を整えている。12月の職員会議には、課題研究を核とした「総合的な探究の時間」の指導の全体計画（グランドデザイン）を示した。

生徒については、1年生に希望テーマについての調査票を提出させ、その希望テーマを踏まえて担当講座への割り振りを行ったほか、これを用いて、教務部の協力により次年度のクラス分け等を実施した。また、LHRを活用して、生徒に向けて次年度に向けた意識付けや情報共有を行うほか、教材として「課題研究メソッド」（啓林館）を全員に購入させ、情報等の授業で副教材として活用した。

#### ○ 成果共有・発表機会の取組について

成果共有・発表機会は、年間2回設定し、予定通り実施した。この二つの発表会については、SGHから継承したものであるが、外部指導者を招聘して行うこれらの機会は、これまで生徒の主体性や表現力を育成することに貢献してきた。その一方で、運営指導委員会等で「答えの出ない問いに取り組ませること、簡単に解決を求めさせないこと」「フィールドワークに出て研究を進めること」などの指摘を受けてきたとおり、社会との関わり、研究の手法や掘り下げ等の点で課題を残すものであり、本事業において順次その形態を変えていくことを予定していた。

まず、7月には「現代の課題」「未来創造」と学んできた3年生のうち「現代の課題α」選択者が留学生と協議する研究報告会として「未来創造会議」を開催した。この会はSGHの取組とともに始めたものであり、SGHの中では3年間の学習の到達点と位置付けられ、2年生を主たる観客として外部に開かれた性質のものだが、本事業実施にあたって今年度変更した点は次のとおりである。

・研究だけでなく現場に出ての活動（地域の小学校での郷土学習教室実施等）に焦点

をあてた取組の研究報告が行われた。

- ・報告と提言が行われたが、提言については、観客が一端教室に戻り、その内容についてクラスで話し合うという参加型の活動を取り入れた。
- ・教室でのポスターセッションをなくして発表数を絞り込んだ。

このうち、一つ目については、生徒の主体的な活動という面もあるが、新事業の趣旨を踏まえてもいる。二つ目三つ目については、新事業に向けた新しい会議の形として、観客となる2年生も主体的に参加できるようにとの意図で、生徒との協議から生まれた形を実施することにした。十分検討の上進めたが、初めての試みであり、準備と実施にいくつか課題が見つかった。

次に、2月に行われた「課題研究発表会」である。こちらは、SGHの課程の下では第2学年での「現代の課題」における探究活動の校内向けの発表・報告会であり、合わせて第1学年「現代のあゆみ」の発表も行っていたが、今年度からは第1学年の課程が変わって「現代のあゆみ」が無くなったことを受け、第2学年の「現代社会」の発表会として実施した。その中で、合わせて今年度の各種の取組についての報告も行った。報告は、大抵は過去から継続的に取り組んでいるものだが、新たな取組のうちで報告発表が行われたのは「総合的な探究の時間学習発表会発表（地域課題に関する取組のポスター発表報告）」「フィリピン語学留学報告（地域企業との連携による留学事業）」「高校生ビジネスプラングランプリ・ベスト100入賞報告」「学食プロジェクト報告（育友会と共同し生徒が本校学生食堂のリニューアルに協力するプロジェクトの成果報告）」の3つである。

なお、この形式での「課題研究発表会」は今年度で終了し、次年度からは第2学年「課題研究」の成果発表の場として、第2学年全生徒のポスターセッションによる交流を実施する予定であり、「課題研究」の深化に更に貢献することを期している。

#### ○ 海外研修、海外フィールドワーク等の取組について

SGHと共に開始した第2学年での海外研修については、教員旅費が通常より大きいことから県による支援を受けており、事業終了後の継続は難しいと指導があった。このため、一時は国内での研修旅行に変えることも検討されたが、結局行き先をシンガポールから台湾に変更し、泊数を減らして実施することにした。初年度ということもあり、事前準備、交流先（私立東山高級中学校）との連絡等に様々な課題を残したが、シンガポールで実施していたプログラムと同等のプログラムを行い、生徒からの満足度も高い研修を実施することができた。

2年アドバンストコースの海外フィールドワーク（オーストラリア）は、今年度3月で5回目の実施となるが、各年において交流校であるバイロンベイハイスクールには本校の期待する交流の趣旨について最大限の配慮をいただいております、毎回期待以上の成果をもって研修を終えることができています。

昨年3月に実施した4回目の研修でも、一昨年からは始まった、生徒の課題研究内容に関わるフィールドワークを高校周辺で行い、また、授業体験とともに参加各班による研究発表プレゼンテーションを行って意見交換を実施した。交流を重ねるごとに、同校には本校の取組をよく理解していただき、意義ある研修を実施することができています。

帰国後、今年度になってから、このフィールドワークで学んだことについて、参加者全員で1、2年の生徒対象に発表会を実施し、アドバンストコースを希望する生徒へのPRを行った。7月の「未来創造会議」では、このフィールドワークで学んだ内容を踏まえた発表を行うことができた。

なお、今年度、同校の所在するニューサウスウェールズ州の教育省から、交流を続け

ていく際には姉妹校等の提携を結ぶよう指導があったため、協議の上、短期留学生ホームステイ受入を中心とした簡易的な姉妹校提携（MoU）を締結した。本事業で配置された海外交流アドバイザーが、この間の連絡調整として大いに貢献した。

#### ○ 国際交流、短期留学、各種コンテスト等の取組について

教育課程外の国際交流等の取組として、以下のような内容を実施した。

##### (1) フィリピン語学留学

今年度初めての試みとして、地域企業（(株)村本建設）の提供による、フィリピンの語学学校における英語研修体験の受講生として第2学年から3名の生徒を選抜し、派遣した。派遣は夏期休業中の5日間であった。現地視察、添乗等まで十分なフォローにより、生徒3人に貴重な体験を積ませることができ、また、次年度の生徒にも目標となるよう、その取組を「課題研究発表会」で報告した。

##### (2) その他各種個人留学等

「まほろばロータリークラブ」…長期の交換留学。受入と派遣を交換する。今年度は7月まで受入1名、派遣2名、9月から受入1名、派遣1名。いずれも1年間の長期留学である（いずれもアメリカ）。

「A I G 高校生外交官プログラム」…短期の留学プログラム。全国40名の募集に1名が選抜され、夏期休業中にアメリカに派遣された。

「かめのり中高生アンバサダープログラム2020」…短期留学。1年生1名が選抜された。

「エンパワーメントプログラム」（主催：(株)アイエスエイ）…企業の協力を得て校内で実施する5日間の英語研修。外国人講師を少人数（5～6名）の生徒で囲み、コミュニケーションを中心としたプログラムを通して英語での表現力等を身に付ける。今年度は1年生26名が参加。

##### (3) 国際交流・受入

「バイロンベイハイスクール（オーストラリア連邦）」…オーストラリアの交流校から生徒16名、教員2名が3泊4日の日程で来日。生徒は全てホームステイで受け入れた。また、終日学校に滞在して、授業体験、2年生の学年全体と交流するプログラムなどを実施した。

「済寧孔子国際学校（中国）」生徒68名、教員6名、ガイド3名が来校し、1年生の海外交流委員（各クラス2名）を中心に学校案内、授業体験をしたあと、1年生の学年全体と交流するプログラムを実施した。

##### (4) 各種コンテスト等への参加

『「僕たち、私たちのまちを国際都市へ」在日外国人と語る街の未来』（主催：檀原青年会議所）…今年度初めての試みとして行われた地域セミナー。檀原市近辺の地域企業に勤める在日外国人の方々と高校生が交流し、街の未来像についてのディスカッションを行い、その結果をコンペ形式で発表した。生徒は1年生2名、2年生9名が参加。

「第7回 高校生ビジネスプラン・グランプリ」（主催：(株)日本政策金融公庫）…全国の高中生がビジネスプランを競い合うグランプリ。2年生6名、計3チームが参加した。全国からの応募3808件から本校の1チーム（1名）がベスト100に入賞した。

「J I C A 全国中学生・高校生国際協力エッセイコンテスト」（主催：J I C A）…毎夏に全国で募集される国際協力をテーマとしたエッセイコンテスト。本校からは1年生

の学年全員が参加。結果、国内機関長賞1名、佳作1名。

「WWL・SGH×探究甲子園（旧SGH甲子園）」（主催：関西学院大学）…2017年度から毎年開催されている、全国規模のSGHを中心とした探究発表コンテスト。ポスターセッションの部門で1チーム（4名）が参加。

#### ○ 事業コンソーシアムについて

事業コンソーシアムを、管理機関、指定校のほか、5つの団体と構成し、年3回の会合を開いた。初年度ではあるが、各構成団体は、これまでの事業で本校と連携してきていただいた団体でもあり、円滑に運営することができた。ただし、従来の協力を越えて、事業全体をリードする部分については、充分その力を発揮できなかった部分があり、今年度最終となる第3回の会合では、その点についての反省が各団体から聞かれた。

各回の概要は以下のとおりであった。

第1回（6／25）…顔合わせ、事業の概要と計画説明、本事業の特徴と各構成団体の役割等について協議した。

第2回（10／2）…事業の進捗、秋期の取組についての打合せ、アドバンストコースの今後の活動方針等についての協議を行った。

第3回（1／27）…今年度の事業報告内容について確認、次年度計画についての協議、各構成団体から、次年度に向けた協力態勢の構築について意見交流等。